

点滴はもういらぬ



佐々木淳、小川利久、  
下河原忠道 著  
ピポ・サイエンス出版  
1500円（税別）

看取りをテーマに、在宅医と特養施設長、サ高住経営者の3人がそれぞれの実践経験を披露する。自宅や「第2の自宅」の施設、集合住宅で亡くなることを目指す。書名のように、点滴などで延命治療を施す病院に行かないこと、思いを共有する。

「第2の自宅」の施設、集合住宅で亡くなることを目指す。書名のように、点滴などで延命治療を施す病院に行かないこと、思いを共有する。

病院で亡くなる人が8割近い日本。欧米では5割弱に過ぎない中で異常なほどに病院依存が進んできた。老衰なのに病気を判断し、延命治療への道を進んでしまう。だが、本書で医師の佐々木淳さんは「治療できるのは『治療可能な病氣』

書評

## 特養とサ高住の看取りモデル提示

年間400人の看取りをしに家族同士が悩みを語り合ってきた。両方での体験から老衰の概念をつかんだようだ。ただ、よく言われるように、老衰か病気の見極めが難しいことは素直に打ち明ける。「本人か家族が決めることであり、医者に任せないでアピールする。この佐々木理論を特養「ハピネスあだち」(東京都足立区)で試みてきたのが小川さん。「死は高齢者福祉の世界ではタブーで、ひたすら隠すもの」とされてきた時代から違和感を感じていた。個別ケアを実践する中で、その到達点として看取り援助に取り組む。だが、家族との軋轢に悩むことが頻繁に。病院に固執する家族との様々なやりとりを本書で振り返り、そのいきさつ、葛藤を詳しく記す。最期を何処で迎えたいかなどを問う「意向確認シート」の作成や家族のための死の準備教育「家族看取り援助勉強会」の開催、さら

に家族同士が悩みを語り合う「看取り援助家族座談会」も開く。家族との情報共有を積極的に進めてきた歩みはまさに特養の教科書といえるだろう。時代の先取りそのものだ。

サ高住を東京で2棟立ち上げた下河原さんも、小川さんと同様に異業種から飛び込んだ。勉強のため視察した病院で、ベッド上の経営栄養の現場を見ながら事務長が「水栽培」と形容する言葉に衝撃を受けた。その言葉を反面教師として在宅死に関わり、「花が枯れるように」亡くなることを目指す。医療や福祉の業界外からの視点、自然で非人間的なケアや不本意な死のあり方に気付きやすいようだ。特養とサ高住の将来モデルになる好著である。

評・浅川澄一

ジャーナリスト

元日本経済新聞 編集委員